

## 研究論文

## 深層心理学における対人不安についての文献の展望

木村大樹

Kimura Daiki

## 1. はじめに

対人不安 social anxietyとは、「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」(Shlenker & Leary, 1982) と定義される心理状態である。精神分析をはじめとする深層心理学では、ほとんどそのはじまりから、対人不安の心理的機序が研究されてきた。ただし、後で見ていくように、対人不安といっても上記のような評価懸念から生じる対人不安に限らず、幅広く様々な種類の対人場面における不安であった。したがって、その機序を説明する深層心理学的理論も併存している。一方、対人不安と似た概念に対人恐怖症がある。対人恐怖症とは、赤面恐怖、視線恐怖などを重症に持つ神経症の一種で、「他者と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのために他人に軽蔑されるのではないか、他人に不快な感じを与えるのではないか、いやがられるのではないかと案じ、対人関係から出来るだけ身を退こうとする神経症の一種」(笠原, 1993) と定義される。したがって、対人恐怖症とは病理的な水準にまで強まった対人不安を主症状とする神経症と言える<sup>1</sup>。ただし、対人恐怖症者は、くつろいで人と付き合えない、集団に溶け込めないといった対人不安に関連する悩み以外にも、ささいなことを気に病む、気分がすぐれない、生きている充実感がないといった対人場面以外での悩みも多い(小川, 1974) 点で異なる。

心理臨床の現場では、現在は従来の古典的対人恐怖症はあまり見られなくなったものの、対人場面における不安を訴えるクライアントは依然一定の割合

で存在する。それらの対人的な不安は、上記の「対人不安」の定義に当てはまる場合もあれば、評価懸念よりもむしろ罪悪感が関係している場合など、多様である。したがって、こういったクライアントが訴える対人的不安は単一の理論で捉えることはできず、様々な要因を考慮し、場合によってはそれらを組み合わせて見立てることが必要である。そこで、本稿では対人不安という用語の概念を「対人場面における不安」にまで広げ、深層心理学が対人不安をどのように理論化してきたかをここに整理したい。したがって、本稿で扱う「対人不安」は上記のShlenker & Leary, (1982) の定義よりも広いものとなっている。また、深層心理学を広義に「力動的」と解すれば、対人恐怖研究の嚆矢である森田正馬の理論や多少力動的な概念を含んだ精神病理学的考察なども含まれることになるが、本稿ではFreud, S.に始まる精神分析とそれを多少なりとも引き継いでいる人の理論を扱うこととした。

これまでに、精神分析や精神力動的な対人不安あるいは対人恐怖に関する文献展望には馬場(1985)、中久喜(2000)、柴原(2007)、福井(2007)があるものの、それぞれの理論のまとめを紹介するにとどまっている。本稿では、対人不安の機序を説明する理論について、それ以前の理論を適用または応用したものではなく、それに追加や修正を施すオリジナルな理論に焦点を当てておよそ時系列順に整理する。それによって、最終的には多様な種類の対人不安の心理学的機序を見立てるために必要な深層心理学的概念を揃えることを目指す。なお、間接的に対人不安の理解に寄与するような理論(神経症、ナルシシ

ズム、恥、など）も対人不安に関連する限りにおいて取り上げた。

## 2. 神経症的対人不安の前提となる神経症理論

### Freud, S.の神経症理論

Freud, S.は対人不安そのものについて述べてはいないが、その後の神経症的対人不安の理解の前提となる神経症全般の理論を構築した。Freudの神経症理論の最もまとまった記述は、『精神分析入門講義』（Freud, 1917）の第三部「神経症総論」であろう。ここでFreudは、神経症は不首尾と固着と葛藤から生じると定式化している。「不首尾」とは欲求不満とも訳され、欲求の充足が拒否されることである。すなわち、現在における何らかの性的不満足が問題となっている。続いて「固着」とは、発達の途上で体質と環境の相互作用によってリビードがある人物やイメージに粘着してしまうことである。ここでは、過去に病因が求められる。そして「葛藤」とは、精神分析においては、二つの内的な要求が対立している状態を意味する。たとえば、三つの審級（自我、エス、超自我）間の葛藤、欲動と欲動の間の葛藤（愛と憎しみ、など）を想定している。この「葛藤」という概念は、その後の様々な深層心理学的理論においても神経症の本質であるとされ、したがって神経症的対人不安の理解のために重要な概念である。

以上の神経症理論に、Freud（1917）は4つの補足をしている。第一に、欲求が（夢と同様に）圧縮と置き換えを被って症状になるということ。第二に、固着を生む体験は客観的な現実である必要はなく、心的現実である可能性もあるということ。第三に、経済的な見地から見ると、欲求は症状になるまでは空想として生きており、リビードが空想に逆流すると、量的にかき乱されて葛藤が起こるということ。第四に、上記の神経症発症機序は基本的にヒステリーを基に作り出したものであり、たとえば強迫神経症では原則的なところは変わらないが、細部で異なるということである。先述の通り、Freudは対人不安についてはほとんど触れていないが、この第

四の補足から考えると、神経症的な対人不安も概ね上記のメカニズムで生じると考えてよいであろう。

対人不安を上記の神経症の機序で説明するには、少なくとももう一つの心理的概念が必要となる。それが、「投影」である（「投射」とも訳される）。投影とは、精神分析においては、「主体が、自分の中にあることに気づかなかつたり拒否したりする資質、感情、欲望、そして『対象』すらを、自分から排出して他の人や物に位置づける作用」とされる（Laplanche & Pontalis, 1967/1977）。この概念によって、外界を心の表れとして理解することができる。この点に関して、Glover（1931）は以下のように補足している。彼は不安を外部からの攻撃性や批判による危険（愛情喪失、去勢不安など）から完全に心理内的な不安（罪悪感など）のスペクトラムとして捉え、愛情喪失の不安と外的攻撃・批判に対する不安はまとめて対人不安として区別できるという。ただしこの内-外の境界線は、投影と取入れによってぼやかされるという。たとえば、外的な権威の攻撃性は投影により誇張され、内的な批判の鋭さは投影によって対人不安に置き換えることで一時的に軽減できる、といった具合である。

### Adler, A.の神経症理論における優越性の目標と利得

Adler, A.の神経症理論は、Freudの神経症理論における性欲の役割を「優越性の目標」に置き換えている以外には、Freudのそれと多くの点で共通しているように思われる。Freudが、リビードこそが根源的事象であると信じていたのに対して、Adlerは優越性の目標こそが人間の本性であると考え、自己顕示を人間にとって一次的な欲求と捉えた。したがって、幼児的な欲望（幼児性欲であれ、優越欲求であれ）が形を変えて成就されているのが神経症であるという点はFreudと共通している。一方で、Adlerは適応の失敗と利得という目的論的観点を強調しており、現在の適応がうまくいっていないために、神経症を「利用している」という点を強調している。これは、精神分析の術語で疾病利得と呼ばれ

るものと同義であろう。

対人不安についても、上記のような理論で捉えている。たとえばAdler (1929) は、対人不安の強いアルコール依存の32歳男性の事例を記載している。彼は内気で、常に震え、タバコが手放せない状態であり、治療者を優越者で敵と捉え、逆に自分には価値が無いと感じていた。そして、友達の中に入っていけず、仕事に就かず、今まで恋愛をしたこともないと言う。この状況をAdler (1929) は、社会への適応の失敗から生じた事であり、人間関係、仕事、恋愛に入っていけないことによって敗北を回避し、結局は優越性の目標を得ていると解釈している。また、飲酒によって母親の心配や関心を得るという二次的な利得もこの状況を助長していると考えている。このように、対人不安の背景に優越性の目標を措定し、結果としての症状や問題を疾病利得という目的論的観点から考察している。

#### 対人不安の疾病利得について

上述の通り、Freudの神経症理論では、症状はリビードが形を変えたものと捉えられていた。このような「症状の中に見出される満足、疾病への逃避、周囲にたいする諸関係の有利な変化など、神経症の動機そのものにおいて考えられる利得」をFreudは「一次的疾病利得」と呼んでいる (Laplanche & Pontalis, 1967/1977)。対人不安においては、赤面、手の震え、発汗などの身体的変化を症状と呼ぶことがあるが、これらが「動機そのものにおいて考えられる利得」を有しているかどうかは意見が割れている。たとえば、「自分の赤面を隠そうとする意識的な努力の底に、自分を他人の前で際立たせようとする無意識的な意図があることは、すぐに見て取ることができる」(河合, 1975) などと、周囲の気を引いて自己顕示欲を満たすという利得の存在が仄めかされることがある一方で、逆に「顔を隠そうとして長く伸ばした前髪が却って異様に映って受け入れられない」などと、本人なりの対処法が却って苦痛を招くという逆説として説明されることもある。ただし、

そのような身体症状が、社会的場面からの引きこもりや恋愛対象に好意を告げないことなどへの言い訳として使われる場合は確かにあり、その場合二次的の疾病利得は得られていると言える。前述のAdler (1929) の理解でも、社会的場面からの引きこもりなどの回避などの消極的症状も優越感を得る空想が致命傷を被らずに保持されている点で利得があるということになる。全ての対人不安が利得をもたらしているとは考えられないが、対人不安においても利得という視点は有用であろう。

#### Jung, C. G.の神経症理論による抽象化

Jung, C. Gも対人不安そのものについては述べてはいない。Jungは神経症理論について主に1910年代にFreudの理論を批判的に修正する形で述べている(それらの論文は著作集第4巻『フロイトと精神分析』に収められている)。特に1912年にFordham大学医学部にて行った『精神分析の理論』と題した連続講演 (Jung, 1912) で、精神分析について概説する中で神経症についてもJung自身の立場から解説している。なお、この年はFreudとの関係が破局しかけていた時期である。そこでJung (1912) が主に主張しているのは、神経症の原因は幼児期にあるのではなく、リビードの退行の「結果」として過去の出来事が利用されているだけであり、本当に問題になっているのは現在における適応の失敗であるということである。そこでの葛藤とは、現実を正しく評価している自分と幻想に浸りたい自分との葛藤である。なお、その他Freudが性の概念を過度に拡張して使用していた点や、その他の(観察ではなく)概念上の誤りについても指摘している。

さらに、Jungは後年になって、疾病利得もなく、ひたすら内的な対立によっておこる「悲劇」としての人生の後半の神経症も考えるようになった(田中, 2016参照)。それに伴い、神経症をさらにニュートラルに、抽象的に理解するようになったように思われる。一般の精神科医向けの講演でも、聴衆の質問に答えて以下のように述べている (Jung,

1935/1976)。

神経症というのはコンプレックスの存在によって生じる<sup>パーソナリティ</sup>性格の分裂です。コンプレックスをもつことそれ自体は正常なことです、もし、そのコンプレックスが互いに相容れないものである場合、意識的な部分とあまりにも矛盾している<sup>パーソナリティ</sup>性格の部分の分裂するのです。… (中略) …分裂したそれぞれのコンプレックスは無意識の状態にあって、間接的な表現手段を探し求めます。それが神経症の症候なのです。精神的葛藤に苦しむ代わりに、神経症に苦しむのです。(Jung, 1935/1976, 邦訳p. 271-272)。

同じ講演でJungは、より日常的な言葉で「どうしたら自分が神経症になるか私にははっきりわかります。つまり、私自身でないことを言ったり信じたりするとそうなるのです。(ibid., p. 206)」とも述べている。すなわち、あらゆる意味での自己との不一致が神経症であると言っている。このように、Jungの神経症理論は、Freudの理論から性的な色合いを脱色しただけでなく、「固着」という原因論を相対化した抽象的な理論であり、それゆえ普遍性が高いと考えられる。ただし、田中(2004)は、Jungの「神経症は自己との不一致である」との見解は素朴な誤りを含んでいると指摘している。実際には「自己との不一致」自体は近代人なら誰も抱えているものであり、その相反する自己の間の葛藤を無視したり、そこから逃れたりすることこそが神経症であるとして、それを「自己との不一致との不一致」と表現している。

以上のJungの神経症理論を援用すれば、神経症的対人不安とは、何らかのコンプレックスによってパーソナリティに分裂が起こり、しかもその分裂を無視しようとする時、その内的な分裂を対人場面で投影して強烈に感ずる現象と理解できる。

#### Frankl, V. E.の神経症理論における悪循環

ここで、Frankl, V. E.の神経症理論から、対人不安に関連すると思われる部分を一点だけ取り上げたい。Frankl (1956) が神経症の理解の上で強調しているのは、症状への過剰な自己注目によってさらに症状が起こるという悪循環である。たとえば、対人不安の事例であれば、声が震えるのではないかと不安になるあまり、話す内容よりも自分の声に過剰に注意が集中して、余計に緊張して声が震えるような悪循環をきたす例がそれにあたる(山本, 1981)。なお、この神経症的メカニズムは、森田の「精神交互作用」という概念と重なると考えられる。

#### 3. 対人不安の欲動論的理解

Freud, S.以降Fenichel, O.までの対人不安の精神分析理論

Freud, S. 以降Fenichel, O.までの時期は、Fenichelの欲動論的な対人不安の定式化が出来上がるまでの知見を積み上げた時期と考えられる。1933年までの赤面恐怖症に関する精神医学的および精神分析的研究については、山村(1933)が網羅的なレビューを行っている。それによると、精神病理学の領域では19世紀から赤面恐怖についての研究があり、1933年時点ですでに赤面恐怖、ひいては対人不安の持つ強迫的側面、恐怖症的側面、ヒステリー的(すなわち転換症状という)側面が議論されていた。また、赤面恐怖症に関する11の精神分析的文献のうち、露出欲に注目している文献が5つ、羞恥心に注目している文献が3つ、超自我や良心に注目している文献が3つ、欲動論的なナルシズムに注目している文献が2つであった。なお、当時は羞恥心を露出欲の反動形成として捉えている。ちなみに、顔に症状が現れる理由については、リビードが下方から上方へ移動し、隠されていない身体部分に掛け口を求めて顔面が性器化する、というFreud(1905)の解釈が当時のトレンドであったようである。

日本においては、山村(1932)がFeldmanの赤面恐怖の事例報告を紹介し、それに続いて赤面恐怖の自験例を報告している(山村, 1933, 1934, 1935)。山

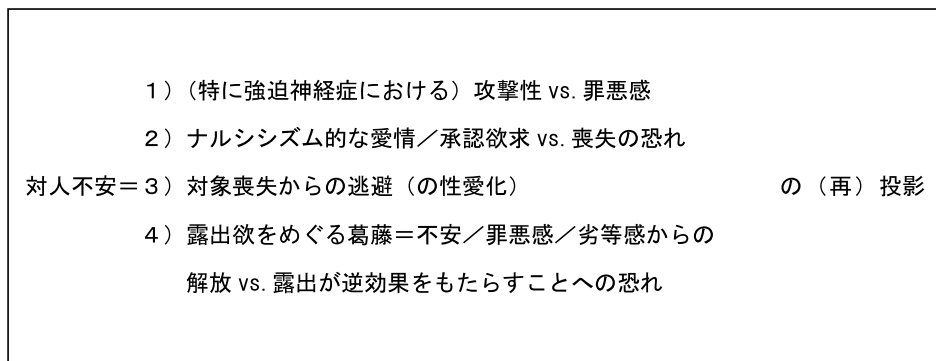


図1 Fenichel (1945) による神経症的対人不安の精神分析理論

村は3人の患者との自由連想法による精神分析的な心理療法を精神分析理論に拠って詳細に考察しているが、訳語こそ現在とは異なるものの、それらの考察は当時の精神分析理論に非常に忠実である。すなわち、エディプス期および肛門サディズム期の固着などのリビド論的理解に加え、露出欲など後述するFenichel (1945) の定式化の例示となっている。この時点ですでにナルシシズムも取り上げられているが、それは未だ欲動論的な意味であり、理論上は後のナルシシズム論と区別すべきであろう。なお、日本の丸井 (1932) や、時代は下るが前田 (1965) も、エディプス・コンプレックス、去勢不安、投影、置き換えなどの概念で対人不安を理解している点で、Fenichel (1945) までの欲動論的精神分析理論を適用しているものと考えることができる。

この時期にSchilder (1938) は、「対人神経症 Social Neurosis」という疾患概念を提唱し、その後の日本における対人恐怖症と同様の、吃音、赤面、震え、発汗などを主題とする極度に高まった対人不安を主症状とする12名の症例を詳細に紹介している。ここでは対人不安以外にもさまざまな症状を細やかに記述している点で精神病理学的な意義があるものの、理論的な発展はないと言える。そのほか、Kaufman (1941) やKlemperer (1957) が、対人不安を主症状とする患者の精神分析および催眠分析事例を詳細に報告している。上記の症例報告もやはり、理論的には以下に述べるFenichel (1945) による理論の内に収まるものと思われる。

#### Fenichel, O.による神経症的対人不安の精神分析理論

Fenichel, O.は、あくまでFreudの理論に基づきながら、あらゆる精神的問題について探求した。Fenichelの神経症各論的な内容の著書 (Fenichel, 1934)、およびそれに精神分析的発達論などを加えた事典のような大著 (Fenichel, 1945) には、対人不安の精神分析的理解についても述べられている。それらをまとめると、対人不安の要因は以下の4つに分けられる (図1)。

一つ目の要因は、攻撃性とそれによって引き起こされる罪悪感に対抗する勢力を見つけないという欲求との間の葛藤である。これはある対象に対する両価性が高まったことの必然的結果と言える。この種の対人不安は強迫神経症者に特徴的である。強迫神経症者は攻撃的傾向があり、それによって超自我からの去勢の恐怖が起こる。このような状況は、自我がエスにも超自我にも二重に脅かされていると言える。超自我はもともと両親の要求や禁止を内在化したものであるが、それが対象に再投影されることによって対人不安となる。この結果、彼らにとって、相手が何を言おうが、何をしようが赦しか非難としてしか受け取られなくなってしまう。なお、この赦しと罰という考えは二次的に性愛化される場合がある。

二つ目の要因は、自尊心を維持するためのナルシシズム的な愛情のニーズとそれを喪失する恐れとの葛藤である。対人恐怖症に近いと考えられるこのタイ

ブの対人不安を抱える人に口唇期の固着を想定している。より成熟した人たちでは、求めるのは愛情よりも理想に適っているという承認になる。

Fenichel (1945) は、これら二つの要因から生じる対人不安に対する対処行動を二つ挙げている。一つは、周りの環境を気立ての良いものにしておくために攻撃的勢力を抑制し、従順さを発達させることである。罪悪感によって危機に瀕した自尊心を相手の慈悲に訴えて立て直すために、他者に異様に礼儀正しくし、人当たり良く接するようになるのである。ただし、そうすると必然的に従順さと攻撃性の葛藤が生じることになる。もう一つの対処行動は、何を受け入れ、何を拒否すべきか判断することを放棄し、相手が自分に何をしてほしいのかだけを知りたいと考え、それに応じて行動することである。このような人の「他律的な超自我」は、両親が一貫性のない行動を示すせいで起こるとしている。

三つ目の要因は、対象喪失からの逃避が退行的に性愛化されたものであるという。この場合は、対人不安はあるものの、その背景に失われた（依存対象としての）超自我の搜索の試みが透けて見える。たとえば、自分を高く評価してくれていた超自我的な対象がいなくなった時（あるいは、いるけれども以前のように評価してくれなくなった時）、いたるところに超自我対象を見出すことになる。こういった人たちが他者に評価されることを非常に重要視するのは、それが性愛化されているからであると説明している。なお、このタイプの対人不安がさらに強まったものが関係念慮やパラノイアであると考えている。ここで注意すべきは、この要因では対人不安が防衛になっている点である。

四つ目の要因は、露出欲をめぐる葛藤である。これは上記の要因の基礎という位置づけになっている。露出は、それ自体から快感を得ることだけでなく、不安、罪悪感、劣等感からの解放をもたらすことを目的として、相手に期待通りの行動をさせる魔術的方法と見なされる。つまり、見てほしいという純粋な欲望だけでなく、目撃者に「去勢などされな

い」ということを証明させたり、罪悪感に抗議するための同意を得たりすることで、安心感を得ることを目指している。しかし、その相手が要求を直ちにうまく満足してくれなかった場合には、彼らに対する暴力的でサディスティックな（口唇期的）傾向が発展してしまう。そうすると、もともと安心が欲しくて、あるいは自尊心を守るためにやった露出行為が、逆に絶滅をもたらすのではないかという無意識的な不安が沸く。すなわち自らの暴力的な攻撃性を恐れているのである。換言すれば、露出により安心感を得たいという欲求と、それによって逆に破滅をもたらすのではないかという恐れの中の内的葛藤が対人不安を喚起していると言える。したがって、結局は第一の攻撃性にまつわる要因へと繋がっていく。これらの機制は赤面恐怖や舞台恐怖に特徴的であるとしているが、さらに「攻撃的な視線aggressive looking」を生じさせると述べており、視線恐怖も含めている。また、公共の場で話すときだけ出るような「露出的吃音」の力動も上記の機制を援用して説明している。

これらの4つの要因は互いに排他的ではなく、実際には相互に補完し合って働いており、ほとんどの事例では、対人不安は上記のメカニズムの組み合わせである。たとえば、強迫的性格の人の中でも口唇期的なナルシズム的欲求が強い人は、自らに贖罪を課すというよりも、周りにアピールすることによって超自我との葛藤を解消する傾向にある、などである。

なお、Fenichel (1945) はひきこもりや内気さなどの対人不安による行動特性を制止として理解している<sup>2</sup>。つまり、ひきこもりや内気さの背景にも、性的な葛藤を措定していることになる。また、対人不安がすべて病的なわけではなく、「対人不安の合理的な成分」は健常の人にも見られ、むしろそれがない方がおかしいという点も指摘している。

さらに、神経症でない人達では、潜伏期や青年期における厳格な超自我へほとんど自動的に反応してしまっていたのが、環境の反応を客観的に判断で

きるように変わっていき、したがって、病理的な対人不安は潜伏期から青年期における現実感の発達の失敗であることを仄めかしている。このことに関連して、「それ（引用者注：対人不安）は子どもの去勢や愛情喪失の恐れと大人のやましい気持ちの中間地点にある」と述べ、対人不安を外的な対象への恐れと内的な自己意識的感情の中間的な状態と捉えている。これは、前述のGlover（1931）の議論と重なるところである。

#### 4. より深い水準の対人不安

対人場面で体験される不安には上述したもの以外にもある。たとえば、Klein, M. の内的対象に対する迫害不安や抑うつ不安も主として対人場面に投影されて体験される。Klein（1952）が「人見知り stranger fear」として描いたものの成人版と言えるが、Klein自身やその後のKlein派とされる精神分析家の文献の中に、特にこのような人見知りや対人不安について述べたものは見当たらない。この水準の不安が対人不安にどのように関連するかは、後述するGabbard（1983）の理論がある。

#### 5. ナルシシズム論の拡張による対人不安の理解の深まり

1970年代以降にナルシシズムと恥の理解が深まったことは、対人不安についての新たな理解をもたらしたと考えられる。それ以前にも、たとえば西園（1956, 1970）は対人恐怖をナルシシズムで説明していたが、その後の対象関係論や自己心理学におけるナルシシズム論の発展によって、ナルシシズム的な対人不安の理解はさらに拡張されることとなった。ナルシシズムそのものについての理解を拡張させた精神分析家としては、Rosenfeld, H.（1987）、Kernberg（1985）、Kohut, H.（1971）らが挙げられるが、いずれも対人不安について考察しているわけではない。ナルシシズムと対人不安の橋渡しとなったのは恥である。Morrison（1989）が、恥をナルシシズムの裏面と呼び、Kohutの理論を恥の文脈か

ら捉え直したものが有名であるが、他の精神分析家からも恥とナルシシズムに関する研究が相次いで発表され（岡野, 1998参照）、Jung派でもJacoby（1991）が恥をナルシシズムとの関連から論じている。岡野（1998）が、すべての対人恐怖の人がナルシシズム的であるとは限らないとしながらも、基本的には対人恐怖や対人緊張をナルシシズムと恥によって引き起こされるとしている通り、これらのナルシシズムと恥に関する多くの深層心理学的研究は恥に駆動される種類の対人不安の理解に寄与したことは間違いない。

ただし、逆に恥という言葉自体は意味の範疇が広く、対人不安のみに収まるものではない。上述のMorrison（1989）やJacoby（1991）などの恥の議論でも、むしろ対人不安についてはさほど扱っていない。ここでは恥自体の考察は本稿の目的を超えるため取り上げないが、対人不安に関連すると考えられる恥の議論の中では、岡野（1992, 1993）の恥を理想自己から恥ずべき自己への転落と捉え、しかも（広い意味での）罪悪感のために理想自己にも留められないために恥と罪悪感のサイクルに陥ってしまうという議論が重要である。

#### 6. 舞台恐怖

舞台恐怖stage frightとは、人前でのパフォーマンス状況において生じる極度に高まった不安である。対人恐怖には舞台恐怖のような大勢の前での不安を含めることも多く、自意識が高まるとどのような対人場面も舞台の上のように体験されることを考えると、舞台恐怖についての理論も広義の対人不安に含めることができるだろう。

舞台恐怖の力動について、Ferenczi（1923/1950）はわずかに述べている（p.421-422）。そこでは、欲動としてはナルシシズムが取り上げられているのであるが、強調しているのはむしろ自己観察である。自己観察とは、自分の声を聞き、一挙手一投足を気に留める客観的興味と自分自身の行動への主観の間の注意の分裂が生じることであり、その観察も

否定的―批判的な観察と肯定的―ナイーヴな観察が拮抗するために不安が生じるのだとしている。その後、Kaplan (1969) が、舞台恐怖の症状として遮断blockingと離人depersonalizationを挙げ、舞台恐怖について詳細に議論している。ただし、その要因については一次不安と罪悪感(およびそれらの中間)を挙げているのみである。

舞台恐怖について包括的に定式化したのはGabbard (1979) である(図2)。Gabbard (1979) は、1) 窃視と露出、2) 罪悪感の力動、3) コントロール喪失、4) 分離不安という4つの要因から考察している。なお、恥の力動についても挙げているが、その具体的力動の説明は1) 窃視と露出に吸収されている。1) 露出欲動はさらに、自立と運動制御を見

#### 1) 露出

自立と運動制御を見せびらかしたい前性器的願望 or 性器を見せびらかしたい性器的願望 vs. 去勢不安

※男性の場合: 「大きいもの」を見せる vs. 小さくて役立たずと思われる

女性の場合: 注意を性器から「素敵なもの」に逸らす vs. 性器が無いことを見抜かれる

#### 2) 罪力動

2-1) 露出=攻撃 vs. 去勢不安

2-2) 観客をコントロールして操作しようとする万能的願望 vs. 罪悪感

#### 3) コントロール喪失

多くの無意識的力の働きで筋肉組織を制御できない vs. コントロール

#### 4) 分離不安

共生期: 「良い」母親が魔法のように願いをかなえてくれるが、分離して強くなりたい vs. 再接近期: 分離と自立を体験できるが、リビードを与えない「悪い」母親の恐怖+無力さ・幼児的欲求を感じる苦痛

#### 5) ミラーリングまたは理想化対象の探索

自己凝集性を保つために必須の観客からのミラーリングと対象の理想化 vs. 拒絶される、飽きられる、自己顕示を責められる、黙られる、去られる恐れ

#### 6) 羨望と貪欲さ

6-1) 羨望 vs. 羨望の防衛として観客に羨望させることによる迫害不安、人の分の良いものを奪った罪悪感

6-2) 貪欲さ vs. 観客から良いものをもらい尽くしてしまう不安

※露出が与えることの困難に対する防衛になっている場合: ばれるかもしれないと思った時に露出は苦痛になる。

図2 Gabbard (1979, 1982) による舞台恐怖 stage frightの精神分析理論



せびらかしたい前性器的願望と性器を見せびらかしたい性器的願望に分けられ、それと去勢不安との葛藤が起こる。対人不安の要因となる男性の場合は「大きいもの」を見せたい欲動と小さくて役立たずだと思われる不安、女性の場合は注意を「素敵なもの」に逸らしたい欲望と性器が無いことを見抜かれる不安の葛藤が起こる。2) 罪力動も二パターンに分けている。露出が攻撃の意味を持つために去勢不安との間で葛藤が起こる場合と、観客をコントロールして操作しようとする万能的願望とそれに対する罪悪感との間で葛藤が起こる場合である。ここまでは Fenichelの定式化と重なると考えられるが、さらに3) 多くの無意識的力の働きで筋肉組織を制御できない不安と、必死にコントロールを取り戻そうとする意志との間の葛藤、さらに4) Mahler, Pine, & Bergman (1975) の理論に拠る分離不安の要因を加えている。分離不安とはすなわち、共生期の「良い」母親が魔法のように願いをかなえてくれる状態に安住したい気持ちと、一方で分離して強くなりたいという思いを持つが再接近期のリビドーを与えない「悪い」母親の恐怖や無力さ・幼児的欲求を感じる苦痛を感じてしまうという発達の葛藤である。この4) はFenichel (1945) の定式化で口唇期の愛情欲求の葛藤とされていた要因を対象関係と発達の観点から定式化し直したものと考えられる。

時代が下ると、Gabbard (1983) は、上記の4つの要因に本稿の第4節、第5節で述べたより深い水準の不安とKohutのナルシズム論を加味する論文を書いている。追加した要因の一つ目は、自己凝集性を保つために必須である対象からのミラーリングと対象の理想化と、拒絶される、飽きられる、自己顕示を責められる、黙られる、去られる恐れとの間の葛藤である。これは、以前の定式化で述べたすべての力動と重畳したり、その底流になっていたという。もう一つは羨望と貪欲さの要因である。対象への羨望に対して対象を価値下げし、万能感空想に浸り、ナルシズムのひきこもりで防衛する。相手に自分を見せることそれ自体も、他の人の分の良

いものを奪った罪悪感や、羨望を対象に投影することで自分が羨望され、迫害される恐怖を覚えたりする。一方、貪欲さとは対象から良いものをすべて引き出そうとすることであるが、母乳が出なくなって去って行く母親のように、観客から良いものをもらい尽くしてしまう恐れと、(羨望と同様に) 貪欲さを対象に投影する事によって対象が恐ろしいものになる場合がある。逆に、スキゾイドの人においては与えることの困難に対する防衛として露出が用いられることもあり、その場合には露出自体は防衛として機能するのであるが、それが防衛であることがばれるかもしれないと感じた場合に苦痛になることがあるという。

## 7. その後の付け加え

ナルシズム理論の拡張以後は、対人不安に関して理論的に大きな前進はないが、以前の理論への別の観点からの付け加えや捉え直しがされている(Gabbard, 1992など)。その一つに、日本の対人恐怖症を社会文化的文脈から捉えるものがある。たとえば土居 (1971) は、対人恐怖の基礎に人見知りの心理を見て、人見知りと甘えは「同じ貨幣の両面」とであると述べている。さらに、それだけでなく、甘えられるルールの発見が困難になってきたという日本の社会文化的な要因も上げている。一方、河合隼雄 (1975) は、日本の「場の倫理」的傾向に対して、対人恐怖症者は「個の倫理」とも呼ぶべき傾向を無意識内に強く感じるために不適応を起こしていると指摘する。こういった理論は、個人と社会の関係が対人不安を生み出していると考える点で、これまでの議論とは異なるものである。なお、この種の対人恐怖症を日本文化から理解する試みは、深層心理学以外の領域、特に1970年～1980年代の精神医学では頻繁になされた。一方、河合俊雄 (2000, 2010) は、対人恐怖を近代主体の確立をめぐる葛藤を示す典型的な症状と捉え、近年対人恐怖が激減しているのは時代が変化するにつれて、主体の確立をめぐる困難が対人恐怖から境界例、解離性障害、そして発

達障害とどんどん形を変えていっているからではないかと論じている。

小此木 (1971) は、上記の土居 (1971) の「甘え」と人見知りの関係についての言説を引き継いで、人見知りについて3つのタイプに分けて説明している。すなわち、第一はSpitz (1962) が「8 ヶ月不安」として概念化した乳幼児の人見知りである。自我の現実認識が発達すると、母親の記憶像による幻覺的な満足は使えなくなることで、見知らぬ人物の認識によってあこがれは不安や困惑にかわるというFreud (1917, 1926) の見解を紹介し、いわば現実認識と現実否認の葛藤であるとまとめている。第二は、Kleinの妄想分裂ポジションの理論において、良い対象の不在が悪い対象による迫害と体験される場合である。Klein (1952) はこの発想が上記の母親の不在に関する不安についてのFreud (1926) の議論を発展させたものであることを明言しており、第一の人見知りをより原始的な心性で理解したものと言える。そして、第三に恥じらいとしての人見知りを挙げている。

McEvoy, O'Connor, & McCarthy (2016) は、社交不安障害を抱える6人の協力者に3回の精神分析的な半構造化面接調査を行い、対人不安や養育環境についての語りや面接における転移-逆転移体験を基に、協力者らのあり方を質的に分析している。彼らは協力者らのあり方を「批判する声」「受動的なあり方」「出立の失敗」「仮面の下」という4つの概念でまとめ、各概念の内容を細やかに記述している。さらに、それらの概念を、Winnicott, D. W.の理論を軸に、Erikson, E.やMahler, M.らの理論から検討しているが、理論として定式化するまでには至っていない。

## 8. まとめと対人不安の深層心理学的理解の限界

以上、深層心理学における対人不安の扱いについて、Freudから現代までを概ね時系列順に整理した。深層心理学においては、さまざまなタイプの対人不安が議論され、その発生機序に関する理論も

いくつも併存していることがわかった。精神分析の文献電子検索システムPsychoanalytic Electronic Publishingで「social anxiety」をタイトルに含む文献を検索してもほとんどヒットしないのだが、これは、深層心理学においては、対人不安とひとまとめにせず、常にどのようなタイプの不安か論じ分けているからであろう。

以上見てきた対人不安に関する理論を以下にまとめる (図3)。Fenichel (1945) の4つの要因に、より深い水準の対人不安やナルシズムの理論を踏まえたGabbard (1979, 1982) の舞台恐怖の定式化を加味したものが筆者なりのまとめである。この定式化は深層心理学のなかでも精神分析のみに拠っている。徹底的に事例の個性や内容を重視するJung 派の視点からは (河合, 2000)、この定式化は対人不安の内容を否定した、形式の類型化に過ぎないかもしれない。しかし、このような形式の類型は、個別の事例の内容に入っていく際の足掛かりとしても役立つように思われる。なお、神経症的な対人不安であれば、結局のところJungの言うように分裂した人格部分の対立の投影という抽象的な枠組みで捉えることもできるし、疾病利得、自己注目と悪循環などの古典的概念も未だ有用と思われる。

逆に、自己意識 self-consciousness および心的外傷 (トラウマ) は、対人不安に関する深層心理学の文献には登場しないが、対人不安の理解のために重要な概念であるように思われる。認知心理学的研究では対人不安は自己意識と深く関連している事が定説化している (Buss, 1980)。また、上述した通り、対人不安の多くは恥や罪悪感によって駆動されているが、これら恥や罪悪感の少なくとも一部は自己意識を前提としている (Lewis, 1995 ; Tangney & Fischer, 1995)。しかし、深層心理学において自己意識は、超自我の機能の一部として語られることがあるものの、十分に理論に組み込まれていないように思われる。Bose (1992) は「自己意識現象をその名の下に直接扱った精神分析的研究はほとんどない。しかし、自己意識の諸側面はしばらく前から舞

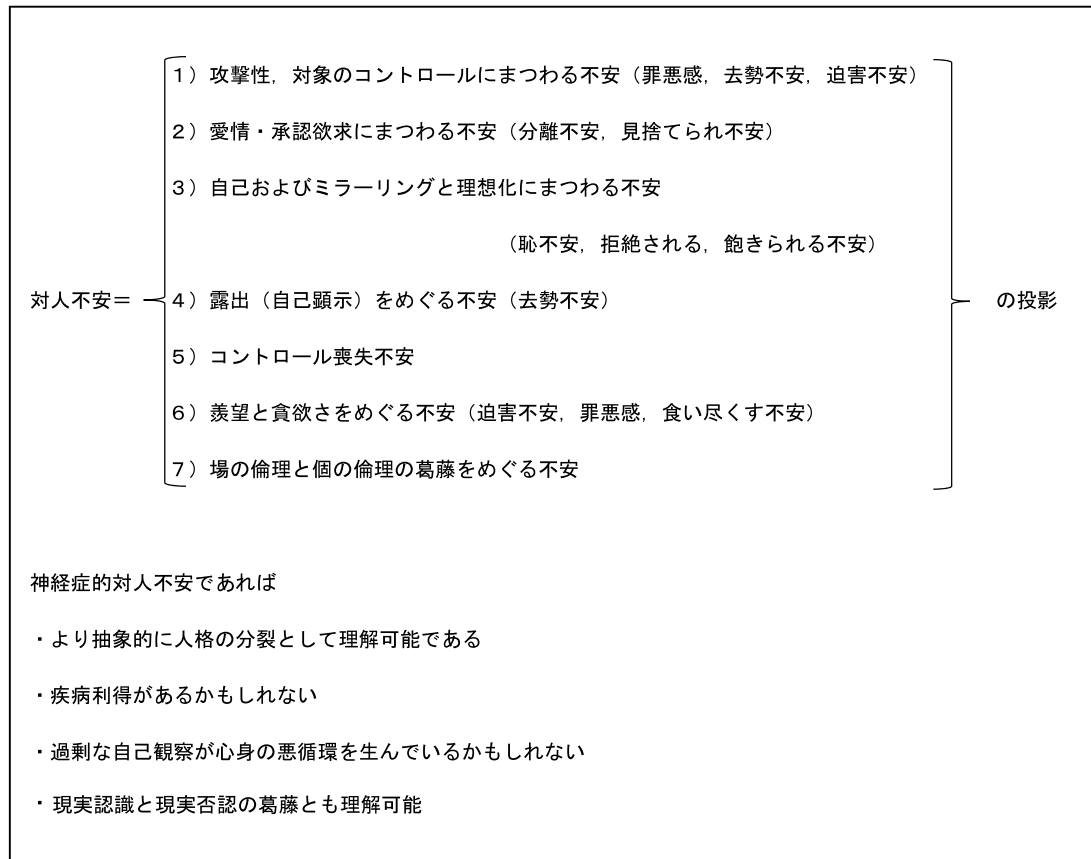


図3 筆者による対人不安の深層心理学的定式化

台恐怖という見出しの下で精神的に研究されてきた」(p. 506)と述べ、Broucek (1991)などの恥に関する精神分析の文献でも、恥の重要な要素として自己意識を重視しているが、それを精神分析理論ではなく哲学や認知心理学によって説明している状況である。

一方、トラウマは精神分析においてはFreudが棄却した概念として半ば否認されてきた経緯がある。近年になってようやく見直されるようになってきたが、未だ対人不安をトラウマとの関連で論じた文献は見当たらない。しかし、実際にトラウマによる対人不安を訴えるクライアントがいることは否定できないように思われ、今後対人不安とトラウマとの関連に関する深層心理学的研究が望まれる。特に、岡野 (2014) が「自己愛トラウマ」と呼ぶような、自己の「価値」を深刻に傷つけるタイプのトラウマが対人不安に与える影響も大きいと考えられる。

## 付 記

注1 対人不安と対人恐怖心性は、後者にのみ「他人に不快な感じを与えるのではないか、自分の存在や欠点が他者に迷惑をかけるのではないか」という意識が見られる点で異なるとする立場もあるが(大西, 2008)、ここでは「対人恐怖は社交恐怖が他者配慮的な日本の文化の中で特殊な形を取ったものだ」という捉え方をしており、両者を本質的に異なるものとは思っていません」という岡野 (1995, p.26) と同じ立場をとる。

注2 現代では「制止」は専ら抑鬱症状の一つとして全般的な活動性の低下を意味するが、この時代の精神分析では主にある身体器官や身体機能などの限局性の制止を指していた。

## 文 献

Adler, A. (1964). *Problems of Neurosis: A Book*

- of Case histories*. Edited by Phillip Mairet. New York: Harper & Row. (Original work published in 1929 by England: Harper Torchbooks.)
- 馬場謙一 (1985). 対人恐怖症の治療に関する考察—精神分析的な精神療法の立場から 精神科MOOK No.12, pp. 144-152.
- Bergler, E. (1949). On acting and stage fright. *Psychiatric Quarterly Supplement*, 23, 313-319.
- Broucek, F. J. (1991). *Shame and the Self*. New York: Guilford Press.
- Buss, A. H. (1980). Self-consciousness and social anxiety. San Francisco, CA: W. H. Freeman & Co Ltd.
- Bose, J. (1992). Stage fright in psychotherapy. *Contemporary Psychoanalysis*, 28, 503-511.
- 土井健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- Fenichel, O. (1934). *Outline of Clinical Psychoanalysis*. New York: W. W. Norton & Company.
- Fenichel, O. (1945). *The Psychoanalytic Theory of Neurosis*. New York: W. W. Norton & Company.
- Ferenczi, S. (1950). *Further Contributions to the Theory and Technique of Psychoanalysis*. London: Hogarth Press. (Ferenczi (1923). *Zeitschrift*, IX, 69. Translated by Olive Edmonds)
- Frankle, V. E. (1956). *Theorie und Therapie der Neurosen*. Wien. (宮本忠雄・小田 晋・霜山徳爾 (翻訳) (2016). (新装版) 神経症—その理論と治療 みすず書房)
- Freud, S. (1905). *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*. (渡邊俊之 (訳) (2009). 性理論のための三篇 渡邊俊之・越智和弘・草野シュワルツ 美穂子・道旗泰三 (翻訳) フロイト全集 第6巻 岩波書店)
- Freud, S. (1917). *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. (高田珠樹・新宮一成・須藤訓任・道旗泰三 (訳) (2012). 精神分析入門講義. 新宮一成・鷺田清一 (編). フロイト全集 第15巻 岩波書店)
- Freud, S. (1926). *Hemmung, Symptom und Angst*. (大宮勘一郎・加藤 敏 (訳). (2010). 制止, 症状, 不安. 加藤 敏 (編). フロイト全集 第19巻 岩波書店)
- 福井康之 (2007). 青年期の対人恐怖—自己試練の苦悩から人格成熟へ. 金剛出版
- Gabbard, G. O. (1979). Stage fright. *The International Journal of Psychoanalysis*, 60 (3), 383-392.
- Gabbard, G. O. (1983). Further contributions to the understanding of stage fright: Narcissistic issues. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 31, 423-441.
- Gabbard, G. O. (1992). Psychodynamics of panic disorder and social phobia. *Bulletin of Menninger Clinic*, 56 (2 Suppl A), A3-13.
- Glover, E. (1931). Sublimation, substitution and social anxiety. *International Journal of Psychoanalysis*, 12, 263-297.
- Jacoby, M. (1991). *Scham-Angst und Selbstwertgefühl: Ihre Bedeutung in der Psychotherapie*. Walter-Verlag. (高石浩一 (訳) (2003). 恥と自尊心—その起源から心理療法へ 新曜社)
- Jung (1912). The theory of psychoanalysis. In Adler, G. & Hull, R. F. C. (Eds.) (1955). *The Collected Works of C. G. Jung, Volume 4: Freud & Psychoanalysis*. Princeton University Press.
- Jung, C. G. (1935). The Tavistock lectures. In Adler, G. & Hull, R. F. C. (Eds.) (1955). *The Collected Works of C. G. Jung, Volume 18: The Symbolic Life: Miscellaneous Writings*. (小川捷之 (訳) (1976). 分析心理学 みすず書房)
- Kaufman, M.R. (1941). A clinical note on social anxiety. *Psychoanalytic Review*, 28(1), 72-77.
- Kaplan, D. (1969). On stage fright. *Drama Review*, 14, 60-83.

- 笠原 嘉 (1993). 対人恐怖 In 加藤正明・保崎秀夫  
ほか (編) 新版精神医学事典 弘文堂
- 河合隼雄 (1975). 自我・羞恥・恐怖—対人恐怖症の  
世界から 思想, 611, 670-685.
- 河合俊雄 (2000). 心理臨床の理論 岩波書店
- 河合俊雄 (2010). 対人恐怖から発達障害まで—主体  
の確立をめぐる In 河合俊雄 (編) 発達障害へ  
の心理療法的アプローチ 創元社, pp.133-154.
- Kernberg, O. (1985). *Borderline Conditions and  
Pathological Narcissism*. Jason Aronson Inc.
- Klein, M. (1952). On observing the behavior of  
infant. (小此木圭吾 (訳) 乳幼児の行動観察につ  
いて In 小此木啓吾・岩崎徹也 (編訳) (1985). 妄  
想的・分裂的世界—メラニー・クライン著作集 4  
誠信書房)
- Klemperer, E. (1957). Social anxiety, early sexual  
and aggressive theories as revealed through  
hypnoanalysis. *Psychoanalytic Review*, 44 (1) ,  
81-87.
- Kohut, H. (1971). *The Analysis of the Self*.  
International University Press. (水野信義・笠原  
嘉 (監訳) (1994). 自己の分析 みすず書房)
- 近藤章久 (1970). 対人恐怖について—森田を基点と  
して 精神医学, 12(5). 382-388.
- Laplanche, J. & Pontalis, J.-B. (1967). *Vocabulaire  
de la Psychanalyse*. Paris: Presses Universitaires  
de France. (J.ラプランシュ・J.-B.ポントリス (著)・  
村上 仁 (監訳) (1977) . 精神分析用語辞典 みす  
ず書房)
- Lewis M. (1995). *Shame: The Exposed Self*. New  
York: Free Press. (高橋恵子・上淵 寿・遠藤利彦・  
坂上裕子 (翻訳) (1997). 恥の心理学—傷つく自  
己 ミネルヴァ書房)
- 前田重治 (1965). 対人恐怖症の精神分析例 精神分  
析研究, 3(7), 7-10.
- 丸井清泰 (1932). 赤面恐怖症, 強通性症状を合併せ  
る「ヒステリー」患者之精神分析 応用心理研究,  
1(2), 188-204.
- Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The  
Psychological Birth of the Human Infant*. New  
York: Basic Books. (高橋雅士・織田正美・浜畑  
紀 (訳) (2001). 乳幼児の心理的誕生—母子共生と  
個体化 黎明書房)
- McEvoy, B., O'Connor, J., & McCarthy, O. (2016).  
Behind the mask: A psychodynamic exploration  
of the experiences of individuals diagnosed  
with Social Anxiety Disorder. *Psychodynamic  
Psychiatry*, 44 (4) , 541-565.
- Morrison, A. P. (1989). *Shame, the underside of  
narcissism*. Analytic Press.
- 中久喜雅文 (2000). 対人恐怖／社会恐怖の精神分析  
精神医学, 29(9), 1111-1118.
- 西園昌久 (1956) . 赤面恐怖症の精神分析 精神分析  
研究, 3(7), 11-15.
- 西園昌久 (1970). 対人恐怖の精神分析 精神分析研  
究, 12, 375-381.
- 岡野憲一郎 (1992). 恥の精神分析 精神分析研究, 36,  
191-200.
- 岡野憲一郎 (1993). 「過敏型」自己愛性格障害にお  
ける罪悪感とエディプス葛藤 精神分析研究, 37,  
150-162.
- 岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析—対人恐  
怖から差別論まで 岩崎学術出版社.
- 岡野憲一郎 (2014) . 恥と「自己愛トラウマ」—あ  
いまいな加害者が生む病理 岩崎学術出版社
- 小此木圭吾 (1971). 人見知り In 小此木圭吾 現代  
精神分析Ⅱ 誠信書房, pp. 125-134. (小此木啓吾  
(1980). 笑い・人みしり・秘密 創元社に再収録)
- 大西将史 (2008). 青年期における対人恐怖的心性と  
対人不安の差異——罪悪感による両概念の弁別—  
— 心理学研究, 79, 351-358.
- Rosenfeld, H. (1987). *Impasse and Interpretation*.  
London: Tavistock Publications. (H・ローゼン  
フェルト (著) 神田橋篠治 (監訳) (2001). 治療の  
行き詰まりと解釈—精神分析療法における治療的  
／反治療的要因 誠信書房)

Schilder, P. (1938). The social neurosis.  
*Psychoanalytic Review*, 25 (1) , 1-19.

柴原直樹 (2007). 対人恐怖症の精神力動 近畿福祉  
大学紀要, 8 (1), 43-51.

Shlenker, B. R. & Leary, M. R. (1982). Social anxiety  
and self-presentation: A conceptualization and  
model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.

Spitz, R. (1962). *Die Entstehung Der  
Objektbeziehungen Dirkte Beobachtungen an  
Säuglingen während des ersten Lebensjahres*.  
(古賀行義 (訳) (1965). 母子関係の成り立ち 同文  
書院)

田中康裕 (2004). 魂のロジック—ユング心理学の神  
経症とのその概念構成をめぐって 日本評論社

田中康裕 (2016). 事例2の見立てと介入—ユング派  
心理療法 In 岡昌之・生田倫子・妙木浩之 (編集)  
心理療法の交差点2 短期力動療法・ユング派心  
理療法・スキーマ療法・ブリーフセラピー 新曜社,  
pp. 151-161.

Tangney, J. P. & Fischer, K. W. (1995). *Self-  
Conscious Emotions: The Psychology of Shame,  
Guilt, Embarrassment, and Pride*. Guilford Press.

山本巖夫 (1981). 対人恐怖と逆説志向および自己観  
察離脱 In 飯田 真・岩井 寛・吉松和哉 (編) (1981).  
対人恐怖—人づきあいが苦手なあなたに 有斐閣,  
pp. 169-180.

山村道雄 (1932). フェルドマン—赤面恐怖に就いて  
東北帝大医学部精神病学教室業報, 1 (2), 126-134.

山村道雄 (1933). 赤面恐怖に就いて (第一報) 東北  
帝大医学部精神病学教室業報, 2, 69-102.

山村道雄 (1934). 赤面恐怖に就いて (第二報) 東北  
帝大医学部精神病学教室業報, 3, 13-38.

山村道雄 (1935). 赤面恐怖に就いて (第三報) 東北  
帝大医学部精神病学教室業報, 4, 5-38.